

## 第2節 久蔵谷遺跡竪穴住居出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久蔵谷遺跡は、大山から放射状にのびる尾根の北東端（標高約55–64m）に位置する。発掘調査により、竪穴住居跡、段状遺構、製炭土坑、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。このうち、竪穴住居跡 SI2 は、焼失住居跡であり、垂木や桁と考えられる炭化材が出土している。これらの炭化材の上層から古墳時代前期の土器が出土している。

本報告では、竪穴住居における住居構築材の木材利用を明らかにするために、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、SI2 から出土した垂木や桁と考えられる炭化材10点（試料番号1–10）である。

### 2. 分析方法

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 3. 結果

樹種同定結果を表4に示す。炭化材は、広葉樹2種類（クリ・スダジイ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2–3列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1–15細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1–2列幅で放射方向に配列する。孔圏部は3–4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

表4 樹種同定結果

遺 構	試料番号	部位	樹 種
SI2 (竪穴住居跡)	1	桁?	クリ
	2	垂木	スダジイ
	3	垂木	クリ
	4	垂木	スダジイ
	5	垂木	クリ
	6	垂木	クリ
	7	垂木	クリ
	8	垂木	クリ
	9	垂木	クリ
	10	垂木	クリ

#### 4. 考察

SI2は、床面が約4.5×4mの隅丸方形～長方形を呈し、四隅がほぼ東西南北方向となる。炭化材は、住居の南側を中心に出土しており、炭化材の軸方向が住居の中央部から放射状にのびる部材と、それに対して直交する部材とがある。前者は垂木、後者は桁の可能性が考えられている。

樹種同定は、住居中央部から南側にかけて炭化材が集中している部分から垂木と考えられる部材8点、桁と考えられる部材1点、住居東側の垂木と考えられる部材1点の合計10点について行った。住居東側の垂木1点はスダジイであった。また、住居中央部から南側の桁はクリ、垂木8点はクリ7点スダジイ1点であった。この結果から、SI2の住居構築材は、クリが多く利用され、そのほかに少なくともスダジイ1種類が利用されていたことが推定される。また、桁もクリであることから、今回の結果をみるかぎりでは、桁と垂木とで木材利用の違いは認められない。

クリは、重硬で強度や耐朽性が高い材質を有する。スダジイも重硬で強度が高いが、耐朽性はクリに比較すると低い。材質面からみれば、住居構築材は強度の高い木材を選択していることが推定される。ただし、今回の試料数は、住居全体の部材数に比較すればはるかに少ない。また、強度の高い木材は、火災の際に燃え残りやすいことが推定される。したがって、クリやスダジイ以外の種類も利用されていた可能性がある。

SI2は、床面上からの遺物の出土がほとんど認められず、火災前に片づけられた可能性が考えられている。一方、炭化材の上層からは古墳時代前期の土器が出土しており、少なくとも古墳時代前期以前に構築されたことが推定される。本遺跡周辺では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての住居構築材について樹種同定を行った例がほとんどないため、当該期の木材利用は不明である。一方、やや離れた倉吉市では、両長谷遺跡で弥生時代後期後半、下張坪遺跡で弥生時代終末の住居跡から出土した炭化材の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1997a,1997b）。その結果では、いずれもスダジイを含むシノキ属が多く認められている。シノキ属の利用は、本遺跡とも共通するが、クリの利用がみられない点で異なる。しかし、こうした違いが地域的な違いによるものか、現時点では詳細は不明であり、今後の検討課題として残される。

#### 引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社,1997a,両長谷遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類.「倉吉市文化財調査報告書第89集 両長谷遺跡発掘調査報告書」,倉吉市教育委員会,57-61.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1997b,下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種.「倉吉市文化財調査報告書第88集 下張坪遺跡発掘調査報告書」,倉吉市教育委員会,113-123.

### 第3節 久蔵谷遺跡製炭土坑出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久蔵谷遺跡では、竪穴住居跡、段状遺構、製炭土坑、土坑、溝状遺構等が確認されている。このうち、製炭土坑からは、製炭されたと考えられる木炭と、それを被覆するような小枝材が出土している。

本報告では、製炭土坑内の木材利用を明らかにするために、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

#### 1. 試料

試料は、SK2とSK3から出土した炭化材各10点、合計20点である。

#### 2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

#### 3. 結果

樹種同定結果を表5に示す。炭化材は、全て常緑広葉樹のスダジイに同定された。解剖学的特徴等を記す。

- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*(Makino Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2列幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

#### 4. 考察

SK2とSK3は、土坑の形態が不整円形～楕円形を呈する。下層に長さ2-5cm、横1.8-4.5cm、厚さ1-2.5cmの製炭材と考えられる炭化材があり、その上に長さ2-3.5cm、横1.1-2cm、厚さ0.7-1.5cmの小枝状の炭化材が認められた。製炭方法は現在もみられる簡易な方法である穴焼法と考えられ、小枝状の炭化材は製炭する木材の被覆材または燃焼材として用いられたことが推定されている。土坑内から時期決

表5 樹種同定結果

遺構	番号	性 格	樹 種
SK 2	1	炭	スダジイ
	2	燃焼材または被覆材	スダジイ
	3	炭	スダジイ
	4	炭	スダジイ
	5	燃焼材または被覆材	スダジイ
	6	炭	スダジイ
	7	炭	スダジイ
	8	炭	スダジイ
	9	燃焼材または被覆材	スダジイ
	10	炭	スダジイ
SK 3	1	燃焼材または被覆材	スダジイ
	2	燃焼材または被覆材	スダジイ
	3	燃焼材または被覆材	スダジイ
	4	燃焼材または被覆材	スダジイ
	5	燃焼材または被覆材	スダジイ
	6	炭	スダジイ
	7	炭	スダジイ
	8	炭	スダジイ
	9	炭	スダジイ
	10	炭	スダジイ

定できる遺物は出土していないが、炭化材の年代測定ではいずれも6～7世紀を示す年代が得られている。これらの炭化材は、全てスダジイであり、製炭材と燃焼材または被覆材とで樹種に違いは見られなかった。この結果から、スダジイの木材を製炭する際に、太い部分を製炭材、細い小枝等を被覆材または燃焼材にそれぞれ分けた可能性もある。スダジイは、重硬で強度が高い材質を有するが、乾燥による狂いが大きく、耐朽性もやや低い部類に入り、建築・薪炭材などとして利用される（平井, 1979）。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、現在でも本地域に生育している。本遺跡では、古墳時代前期以前の住居跡から出土した炭化材にもスダジイが認められている。製炭土坑の樹種同定結果から、6～7世紀の段階でも遺跡周辺にスダジイが生育しており、その木材を製炭した可能性がある。

本地域では生産遺構、例えば製鉄や窯等から出土した燃料材の樹種を明らかにした例がほとんどない。また、遺跡における検出状況等も含めて、現時点ではスダジイの木炭の用途については不明である。今後、同時期の生産遺構における燃料材の木材利用状況に関する資料を蓄積し、木炭の用途についても検討していきたいと考える。

#### 引用文献

平井 信二,1979,木の事典 第3巻.かなえ書房.

## 第5章 まとめ

久蔵谷遺跡では、竪穴住居跡2棟、土坑6基、段状遺構1基、溝状遺構1条、ピット3基が確認された。ここでは久蔵谷遺跡で確認した遺構・遺物について若干触れ、まとめとしたい。

集落関連遺構として、その性格が窺えるものに竪穴住居跡2棟があった。このうちSI2の時期は出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられた。SI1は出土遺物から帰属時期を窺うことはできなかったが、調査状況から古墳時代前期頃と思われる。この久蔵谷遺跡に竪穴住居が営まれた古墳時代前期における周辺の集落遺跡には、井岡地頭遺跡（君嶋・大野他 2003）、三林遺跡（家塚・君嶋他 2004）、笠見第3遺跡（牧本他 2004）、久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡（小山・野口・長尾他 2004）、八橋第2遺跡～第4遺跡（大賀 2001）が知られる。このうち本遺跡SI2で具体的に帰属時期が窺えた古墳時代前期初頭に限れば、三林遺跡、笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡で集落が展開される。

上記の3遺跡の様相は、いずれの遺跡においても弥生時代後期後葉は集落としての最盛期に位置づけられるが、続く弥生時代後期末から古墳時代前期初頭においては縮小期を迎える。このうち笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡では集落の営みはさらに衰退し、古墳時代前期中葉から後葉にかけて集落は中断する。しかし、三林遺跡においては、前期前葉から中葉にかけては、再び最盛期を迎える状況になる。このことに対し、三林遺跡では、東に近在する井岡地中ソネ遺跡（君嶋・大野他 2003）が弥生時代後期後葉は集落として営まれるが、古墳時代前期初頭に墓域化することから、この時期に三林遺跡と井岡地中ソネ遺跡の集落間で統廃合が行われたことが推測されている（家塚・君嶋他 2004）。

このように周辺遺跡の動向と照らし合わせて見た場合、久蔵谷遺跡で竪穴住居の造営が始まる古墳時代前期初頭の時期は、周辺遺跡においては集落として縮小期にあったことがわかる。そして、いずれの集落遺跡においても同時期に縮小期を迎えることから、近在する集落でその営みに強い関連性があったことが窺える。このことからすると久蔵谷遺跡における竪穴住居の造営も、周辺遺跡の動向と深い関係があったと思われる。本遺跡を周辺遺跡との関係から捉えた場合、本遺跡竪穴住居の造営は近在する久蔵峰北遺跡から分散した可能性が高い。両遺跡は間に比高差30mの谷を挟み、別の尾根に立地するが、距離は70mと指呼の間にあり、お互いに見晴らしも良い。そして本遺跡竪穴住居の存続が長くとも前期までとすることも、久蔵峰北遺跡の集落の消長と一致するものである。

上述の解釈が妥当であるならば、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭における周辺集落遺跡の縮小化は、久蔵谷遺跡と久蔵峰北遺跡の関係から窺うことができた分散が要因の一つとして考えられる。そしてさらに、古墳時代前期前葉の三林遺跡における集落統合などを勘案すると、久蔵谷遺跡で竪穴住居が営まれる時期は、分散や統合など周辺の集落が再編を迎えた時期であったと考えることができるかもしれない。

さて、以上のように周辺集落の再編期に営まれた久蔵谷遺跡竪穴住居であるが、確認されたSI1・2はともに焼失住居であった。県内の焼失住居に関しては、弥生時代後期後葉に卓越して認められることが指摘されるほか、その頃の焼失住居には、床面出土遺物の多寡から、片付け行為をした後、放火により廃棄されたものが多かったことが考えられている（牧本 2002）。SI1は遺構の遺存状況は芳しくなかったため、これらのことについて具体的にはできないが、SI2は第3章で触れた通り、片付け行為が行われたと考えられ、住居の焼失要因は、失火ではなく放火であった可能性が高い。上屋構造については、住居埋土下層から垂木材と判断される多くの炭化材の出土が見られた。そして炭化

した垂木材に挟み込まれ、住居焼失間に堆積したと判断される土層の存在から、土屋根の可能性が高いと思われる。また出土炭化材においては樹種同定分析の結果、クリとスダジイが建築部材として用いられていたことが明らかとなった。鳥取県中部における弥生時代後期から古墳時代前期の住居建材へのクリ材利用に関しては、従来の調査では明らかでなかったが、近年、井岡地中ソネ遺跡、三林遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡などで確認されている。

そのほかSI2P4直上からその縁辺部にかけては、棒状の礫が14個まとめられた状態で認められた。これらは見た目にはその大きさにあまり違いは認められず、石材の種類も角閃石安山岩や角閃石石英安山岩であるなど、一見では同じ石材に見えることから、同質、同規格を意識したものであったと思われる。使用の痕跡は1点に敲打痕が確認されたほかは、明確な痕跡は認められなかった。このような集礫の例は、近隣の遺跡では倉吉市夏谷遺跡（森下他 1996）、同市立縫遺跡群（倉吉市教育委員会 1986）、琴浦町三林遺跡などがあげられる。立縫遺跡群の礫はその詳細は不明であるが、夏谷遺跡では使用痕から石錘、三林遺跡では煤の付着から炉などに土器を据え置くための支石としての機能が考えられている。本集礫の性格は使用の痕跡がほとんど確認されなかったことから明らかでないが、柱の際に並べられていた出土状況は、礫の利用方法や保管方法を反映している可能性がある。

集落関連遺構以外には製炭土坑と思われる4基の土坑が注目される。これらは遺構内に焼土や被熱痕がほとんど認められなかったが、製炭土坑は材を完全に燃やさず製炭させることから、土坑床面の赤色焼土化はせず、壁の焼成も弱いなどの指摘（木立 1997）もあり、炭化材の出土状況からは製炭土坑と位置づけることが妥当と思われる。また、従前の調査研究では製炭土坑の多くは伏焼き法として、焚口部を設けるものと設けないものを一括して扱われている（村田 1991）が、本遺構ではその規模、形態、焚口などの施設を設けられた痕跡が認められなかったことから、穴焼き法と類似したものと考えられた。また、放射性炭素年代測定法による炭化材の分析の結果、5世紀末から6世紀中頃の時期が推定されるが、上記の伏焼き法としてまとめられる製炭土坑は、鍛冶関連の木炭窯として5世紀末から認められるようである（穴澤 2003）。周辺の遺跡においては、別所中峯遺跡で確認された製炭土坑も、同遺跡や隣接する八橋8・9遺跡で確認された鍛冶関連遺物との関係で捉えられている（大野他 2004）。本遺跡の場合も遺跡東側に位置する中道東山西山遺跡（高尾他 2005）で鍛冶関連施設が確認されているが、9世紀代のものであり、本遺構と同時期の遺構が周辺の遺跡において認められていない状況では、現在の段階ではその製炭の目的は明らかでない。

以上、久蔵谷遺跡で確認された遺構・遺物について若干触れたが、その多くは具体的に検討するまでには至らなかった。今後の課題としたい。（野口）

#### 参考文献

- 穴澤義功 2003「古代製鉄に関する考古学的考察」『近世たたら製鉄の歴史』丸善プラネット  
 家塚英詞・君嶋俊行他 2004『三林遺跡・井岡地頭遺跡』鳥取県教育文化財団  
 大野哲二他 2004『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡』鳥取県教育文化財団  
 大賀靖浩 2001『八橋第2遺跡～第4遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会  
 木立雅朗 1997「土器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編  
 君嶋俊行・大野哲二他 2003『井岡地頭遺跡・井岡地中ソネ遺跡』鳥取県教育文化財団  
 倉吉市教育委員会 1986『立縫遺跡群発掘調査概要』  
 小山浩和・野口良也・長尾かおり他 2004『久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡』鳥取県教育文化財団  
 高尾浩司他 2005『中道東山西山遺跡』鳥取県教育文化財団  
 牧本哲雄 2002「妻木晩田遺跡の焼失住居について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』鳥取県教育委員会  
 牧本哲雄他 2004『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団  
 村田文雄 1991「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55物質文化研究会  
 森下哲哉他 1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会

表6 土器観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量(cm)	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	SI2	第13図 PL.9	土師器 甕	器高5.2△ 口径17.0※	外面口縁部・頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	口縁部一部 スス付着
2	SI2	第13図 PL.8	土師器 甕	器高6.4△ 口径12.6※	外面口縁部・肩部ヨコナデ・刺突文。 内面口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	やや密(1mm 以下の砂粒を 含む)	良	内外面明黄 褐色	外面スス付 着
3	SI2 南東区 埋土中	第13図 PL.8	土師器 甕	器高6.3△ 口径17.2※	外面口縁部ナデ。肩部ハケ目。 内面口縁部ナデ。肩部ヘラケズリ。	密(1mm以下の 砂粒を含む)	良	内外面浅黄 色	
4	SI2	第13図 PL.7	土師器 甕	器高17.0△ 口径13.6※ 胸部最大径 16.6※	外面口縁部沈線・ナデ。頸部ナデ。胸部 ハケ。内面口縁部ナデ。胸部ヘラケズリ。	密(3mm以下の 砂礫を含む)	良	内面にぶい 黄褐色 外面にぶい 黄橙色	内外面スス 付着
5	SI2	第13図 PL.8	土師器 甕	器高9.6△ 口径15.8※	外面口縁部ナデ。肩部ハケ目。 内面口縁部ナデ。肩部ヘラケズリ。	やや密(2mm 以下の砂礫を 含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	
6	SI2	第13図 PL.8	土師器 甕	器高8.7△ 口径16.4※	外面口縁部ヨコナデ。肩部ハケ目。 内面口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ後 ナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	やや 良	内外面浅黄 褐色	外面口縁部 スス付着
7	SI2	第13図 PL.7	土師器 鼓形器台	器高14.8 口径23.5 底径20.8	外面受部ナデ後ハケ目。筒部・脚部ナデ。 内面受部・脚部ナデ。筒部ヘラケズリ後 ナデ。	密(4mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面明黄 褐色～橙色	内外面スス 付着
8	SI2	第13図 PL.9	土師器 高坏	器高4.0△ 口径19.6※	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	
9	SI2	第13図 PL.9	土師器 低脚坏	器高2.3△ 底径6.4	外面脚部ナデ。 内面脚部ナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面浅黄 褐色	
10	SS1 2層	第27図 PL.9	土師器 甕	器高6.7△ 口径14.4※	外面口縁部ヨコナデ。肩部ハケ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ後 ナデ。	密(1mm以下の 砂粒を含む)	良	内外面浅黄 褐色	外面スス付 着
11	SS1 3層	第27図 PL.9	土師器 甕	器高7.4△	外面口縁部・頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ後ナデ。	やや密(1mm 以下の砂粒を 含む)	良	内外面浅黄 褐色	
12	SS1 3層	第27図 PL.9	土師器 低脚坏	器高2.4△ 底径7.0※	外面脚部ヨコナデ。 内面坏部ナデ。脚部ナデ。	やや密(2mm 以下の砂礫を 含む)	良	脚部内外面 橙色 坏部浅黄色	
13	SS1 2層	第27図 PL.9	土師器 高坏	器高4.9△ 口径29.9※	外面坏部ミガキ。 内面坏部ミガキ。	密(3mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面浅黄 褐色	
14	J3 表土	第30図 PL.8	土師器 台付甕	器高7.2△ 胸部最大径 14.7	外面胸部・台部ハケ後ナデ。 内面胸部・台部ヘラケズリ後ナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内面明黄褐 色 外面浅黄色	
15	K3 表土	第30図 PL.8	土師器 低脚坏	器高4.7△ 底径12.2※	外面坏部・脚部ハケ後ナデ。 内面坏部・脚部ナデ。	密(1mm以下の 砂粒を含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	赤彩

表7 石器・礫観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
S1	SI2	第13図 PL.9	礫	角閃石安山岩	17.0	10.0	4.7	985	
S2	SI2	第13図 PL.10	剥片	水晶	4.1	1.7	1.2	6.7	
S3	SI2	第13図 PL.9	砥石	細粒花崗岩	26.8	14.4	10.1	5,200	表面に磨面あり
S4	SI2 P4上面	第14図 PL.9	礫	角閃石安山岩	17.1	8.0	4.0	878	
S5	SI2 P4上面	第14図 PL.9	礫	角閃石石英安山岩	17.2	5.7	5.0	840	
S6	SI2 P4上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	18.3	8.7	4.0	1,087	
S7	SI2 P4上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.5	6.1	5.0	771	

## 久蔵谷遺跡遺物観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
S8	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.7	7.6	5.5	1,069	
S9	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.4	7.5	4.4	840	
S10	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石石英安山岩	16.0	7.7	5.9	1,088	
S11	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	14.7	7.0	6.2	1,243	
S12	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.4	7.6	3.6	684	
S13	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石石英安山岩	16.3	7.1	4.2	701	
S14	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	14.9	7.1	4.9	704	
S15	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.1	6.3	4.3	697	敲打痕あり
S16	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	18.7	7.5	4.9	909	
S17	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	17.2	6.0	4.6	763	
S18	SS1	第27図 PL.10	敲石	角閃石安山岩	8.6	4.6	3.4	207	片側に敲打痕あり
S19	SD1 2層	第29図 PL.10	石錘	角閃石石英安山岩	8.3	5.6	2.3	164	楕円礫の長軸両端 を打ち欠く
S20	SD1 2層	第29図 PL.10	石錘	角閃石安山岩	7.1	6.3	2.7	171	楕円礫の長軸両端 を打ち欠く
S21	I4 表土	第31図 PL.10	敲石	角閃石安山岩	15.5	5.7	4.3	599	表面・両端部・両 側面に敲打痕あり
S22	L3 表土	第31図 PL.10	敲石	角閃石安山岩	12.7	6.0	4.2	459	上端部に敲打痕あ り
S23	I5 表土	第31図 PL.10	石錘	石英黒雲母安山岩	9.0	6.7	2.2	171	楕円礫の両端・両 側面を打ち欠く
S24	B2 表土	第31図 PL.10	石錘 磨石 敲石	角閃石安山岩	9.2	7.8	4.9	484	表面に磨面、表裏・ 両側面に敲打痕あ り
S25	遺跡一括	第31図 PL.10	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	1.0	凹基無茎鏃
S26	C2 表土	第31図 PL.10	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.7	凹基無茎鏃
S27	L4 表土	第31図 PL.10	石鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.6	1.2	凹基無茎鏃

表8 鉄製品観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
F1	SI2	第13図 PL.10	鑿状鉄製品	3.0	1.9	1.1	5.0	



写 真 图 版

PLATE

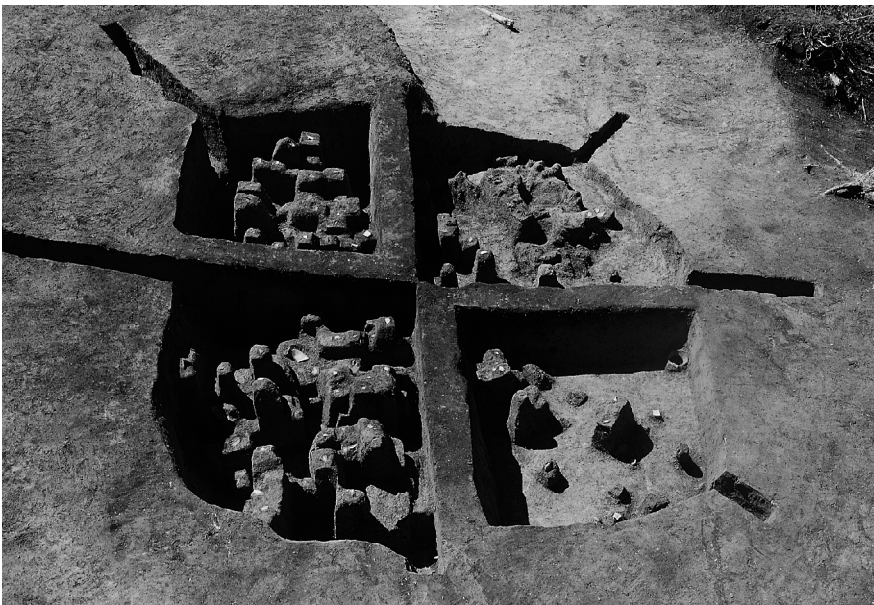
PL.1 久蔵谷遺跡



SI 1 遺物出土状況  
(南東から)



SI 1 完掘状況  
(北東から)



SI 2 遺物出土状況  
(北東から)